

日本説話索引 全七巻

●第()巻を申し込みます(冊)
●全七巻を申し込みます(セット)

ご住所 〒

お名前

TEL

お取り扱い

清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内 2丁目8番5号
電話 06(6211)6265 FAX 06(6211)6492
https://www.seibundo-pb.co.jp

編集委員より

森 眞理子

いよいよ『説話索引』も第五巻の刊行となった。折返し点を過ぎ後半の山場が近づいてきた。この索引の出発点から考えると、既に四十数年が経過しており、その間多くの人が樗をつないで、今この地点までたどり着いたのだといえる。長い行程に携わった多くの足跡ならぬ手の跡は、編集している原稿のあちこちに垣間見える。この要約文の作り方の特徴はきつと某さん、と想像し、また出典ページが原文と読み下し文の両方から採られている箇所に出会うと、これは二人の手作業によるのだろうと納得する。そんなことを考えていると、自然と作業の積み重ねに費やした長い時間を思わずにはいられないが、編集を進める上では、そんな感慨にいつまでも浸っている訳にはいかない。実際の編集作業は、ただ黙々と文字を追っていく日々である。読みやすく、検索しても分かりやすい、読者に資する索引になるよう心がけて、項目の見出し語や本文を検討

してみる。見出し語に重なりがないかに注意し、似た見出し語で最終的に同じものを指しているものでも、使われた時代が異なるので二つとも残す方がよさそうだ、などと考へながら文を読み込んでいく。一つの説話と別の話に思いがけぬつながりがあることを発見することもある。ただ簡単に一つにまとめてしまうのは、説話の幅広さを狭める恐れもあるので、残せるものはそのまま置いておく場合もある。当然のことながら編集の段階においても樗をつなぐ手作業は続いていて、初めから或いは途中から参加してくれた担当者の力に大きく寄っていることは言うまでもない。この索引を手にした方が、いわゆる「辞書」とは違う緩やかなまとまりを、印象として持たれるとしたら、出典から説話を切り出す際に携わった多くの人たちの手仕事を生かし、要約の中に残された原文の息遣いを味わって欲しいという、編集姿勢の表れとして了解して頂ければ幸いである。冒頭、この索引の刊行までの行程を駆伝に例えたが、これまで推薦文を執筆して下さった方々の、各分野における新しい読み方の提示と熱のこもった声援とは、編集部にとつて力強い励ましとなった。ゴールまでもうしばらくの道のりである。力を抜かず終盤まで駆け抜け、完成を目指したい。

第五回配本(第五巻)

日本説話索引 全七巻

説話と説話文学の会編 ◆ ISBN978-4-7924-1463-4 C3591 (第五巻)



◎B5判・上製本・貼函入 総1094ページ
定価 本体32000円+税

第一巻 あ〜かか 第二巻 かき〜こうひ 第三巻 こうふ〜しゆ
第四巻 しよ〜ちゆ

各定価 本体22,000円+税

第六巻以降順次刊行予定

【編集委員】

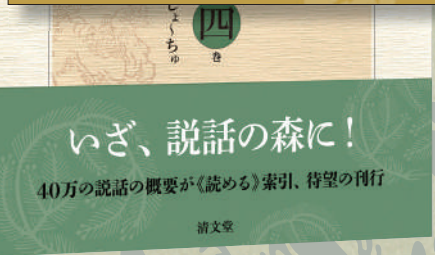
池田敬子 朝比奈英夫
出雲路修 柴田芳成
田村憲治 白井伊津子
芳賀紀雄 中畷容子
森眞理子 橋本正俊
山本登朗 森田貴之

清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内 2丁目8番5号
電話：06(6211)6265 FAX 06(6211)6492
ホームページ：https://www.seibundo-pb.co.jp
メール：seibundo@triton.ocn.ne.jp

日本説話索引 全七巻

説話と説話文学の会編 ◆ 第五巻 ちよ〜はん 好評配本中 清文堂



説話文学索引から説話索引へ

安達敬子 京都府立大学名誉教授

二〇二〇年から刊行が開始された『日本説話索引』（全七巻）の第五巻がいよいよ出版の運びとなった。この企画を初めて耳にしたのは三〇年以上前のことだった。編集委員の池田敬子先生とは勤務先の同僚だったので、折に触れて説話のカード取りのご苦労や進捗状況などを伺っており、その作業に携わる若手研究者の方々の精魂込めた仕事ぶりを拝見する機会もしばしばあったと記憶する。これまでに刊行された紙面の充実はまさに壮観というしかない。大本の旧『日本説話文学索引』と比較しても、本索引は量的に格段の増補がなされただけではなく、収録された項目の対象は文学のジャンルを超えて史書・言談・唱導・歌学・注釈・寺社縁起・法話・雑纂・芸能・古辞書等の分野に及んでいる。そうした中世的な知のフィールドにおいて、掲載項目が各々どのようにマッピングされているかが示される。

たとえば「人名」について。業平や定家といった著名な人物ばかりではなく、現代ではほとんど知る者もないような人名が数多く取り上げられている。説話の要旨とともに

遠大なる情報の集積

兼築信行 早稲田大学文学学術院教授

旧版の『増補改訂 日本説話文学索引 縮刷版』には、たいへんお世話になった。学部学生の時、日本文学の専修室に配架されたこの索引を手にとり、コンパクトな体裁に詰め込まれた情報の豊かさ、そして利便性に仰天した。爾来、事あるごとに紐解き、大学院に進学した時、神田にある国語国文学専門の古書店に赴いてようやく入手、常に身辺に置いて活用した。私自身は説話の研究者ではなく、和歌を専門とするが、歌人の逸話を博捜するために、拠るべき第一のツールとなった。

その旧版を引き継ぎ、規模と内容、面目を一新して企画された『日本説話索引』の編集が、説話と説話文学の会により着手されたのは、一九八〇年と聞く。第一巻は二〇二〇年に刊行され、二〇二一年に第二巻、二〇二二年に第三巻、二〇二三年に第四巻と毎年順調に進み、このたび第五巻の上梓を見る。全七巻の完結も、いよいよ視界に入ってきた。

本索引の狙いは、凡例冒頭に記される通り、説話の要旨を縮約、「読める索引」として「作品本文への道しるべ」を

掲載された複数の書名から、その名の主が中世人の教養において、如何なる位相でどのように認識されていたのかが一目瞭然となる。漢籍が源流にある中国や古代インドの人名・地名についても同様で、記述された内容をたどっていくことよって、その人物や土地がどのような経路で和文化され内容を展開させながら、日本の説話として定着していったのかをうかがい知ることができる。およそ人名辞書にはでてこないような端役、あるいは架空の人物の逸話とその舞台が掘り起こされ、出典間のネットワークもまた同時に浮かび上がってくる。そして、改めて中世までの学芸どのページを披いても痛感されるのである。

出版物としての分量的な制限があるとはいえ、本索引は文学作品のみならず可能な限りその基層・周縁までも視野に入れた、中世人の精神世界全体を対象にした企画と言える。既巻の推薦文でも、これは「読める索引」であると同時に「読むべき索引」であるとの評言があった。全面的に賛同しつつ、さらに「読まずにはいられない索引」と付け加えたい。説話索引であると同時に中世語彙の百科辞典、加えて類書の機能をも兼ね備えた驚嘆すべき書物、それが『日本説話索引』なのだ。

提供するものである。人名や地名のみならず、様々な事項も拾われて、単なる項目検索に留まらず、稀代の規模、類のない利便性を実現した。

ところで、こうした情報量の豊かさを誇る索引や辞典類は、凄まじい勢いでIT化が進む現代、どのような形態へと進化していくことになるのだろうか。既に『日本国語大辞典』や『角川古語大辞典』はオンラインデータベースで活用されるようになった。和歌研究者である私が頻用するツールでは、『新編国歌大観』や『新編私家集大成』が断断の事例である。

こうした大部の辞典、本文・索引の編集には、気の遠くなるほど膨大な時間と労力とが費やされたことは言を俟たない。本索引においても、まずは紙媒体としてしっかりと作り上げられた現物を手に取り、研究者の書架に配し、図書館に備え付け、十全に活用を重ね、さまざまな意見を吸収したうえで、はじめて、次なる進化・展開を期すべきであらう。

本索引の完結まであと二、三步となった。長年にわたる編集過程に払われた努力に対して、改めて心より敬意と感謝を表するとともに、未来への進化を夢想しつつ、いま、頁を捲っている。

本文組見本

鳩はと(鳩)は997頁から2頁と少し、1000頁から鳩の関連項がずらり

上六・卯▽蘇りし土師時躬の幼子に憑きて、長谷寺の護法善神とあることを告げしにより、鐘樓の東脇に社を造り勧請す(長谷寺・上六・卯)▽大安寺の住侶惠尋人唐して、長谷寺にて幼子に憑きて——の語りしことの確かなるを知る(長谷寺・上六・卯)▽長谷寺の興元に憑きたる護法、——なりとて、宋の陽州穩積郡なる大唐国第四皇后君鳥女大神なり、神名帳に勧請せよという(長谷寺・上六・卯)▽長谷寺の勧請に応ずれば、虎の皮の出現する所を我が影向と知れという(長谷寺・上六・卯)▽長谷寺の神名帳に——を勧請するに、二十三年間修正会、修二会に、虎の皮異香薫じて出現す(長谷寺・上六・卯)▽長谷寺の——影向の間に行きて、職殺され、あるいは口走りて名揚げなどすることあり(長谷寺・上六・卯)▽唐土の后、十種の宝物を長谷寺に送ると、源氏物語に書けるは、——のことを思えるなり(長谷寺・上六・卯)▽唐土の——、長谷寺の観音を仰ぎ、七日に所願成就し、報恩結縁のため長谷寺の護法善神となる(長谷寺・下二六・卯)▽唐の僖宗の后の——は、玄宗の孫にて、玄成太子の娘なり(河海・二〇・卯)▽唐の僖宗の后の——、醜きことを歎き仙人の教えにより日本の長谷寺の観音に祈る(河海・二〇・卯)▽長谷寺の観音に祈りし、東より紫雲に乗りて来し貴僧に瓶水を顔に灑がると夢に見て容貌端正となる(河海・二〇・卯)▽長谷寺の観音に祈りて容貌端正になりし、——、乾符三年七月十八日、明州の津にて十種の宝物を奉る(河海・二〇・卯)▽瓶水の醜きを祈りし唐の——は、貴僧が面に瓶水を注ぐ夢を見て端正なる(謡抄・玉鬘・卯)

破東平三▽三千仙人誰得聽三、及第の日に鳩島三出雲国三鳥根郡の——は、周り百二十歩、高さ十丈なり、都波・茨あり(出雲風・卯)鳩杖三▽敦順、和歌の尚闕会に——をつき鳥皮の沓をばきて参参(著聞・三〇三・卯)▽志賀寺上人、京極の御息所への深き思いを申して、心安く臨終をせばやと、狐裘に——をつき御所へ参る(太平・

三二五・卯)▽人の六十に及ぶ三枝礼になぞらえ、五十にえて——という(直談四本・及ぶを——というは、年々に喘せるを鳩の喉広きを杖養生となるゆえなり(直談・採桑子、衰老せし時(体源・五・卯)鳩のうずらはと▽——とは、鳩のきぎずとも言う(藻塩・鳩のきぎずとも言う(藻塩・鳩にて、——とも言う(藻塩・鳩の峯はとの峯(鳩の峯)▽八幡その山の頂を尋ぬるに、——に金色ありて三道に——に金色ありて三道に——に金色ありて三道に——に見るに、大樞あ(八幡乙・上・三・卯)▽行教、日夜候い、法味をもつて飾(八幡乙・上・三・卯)▽清和天皇、勅使を下し、——を允良基に宣旨を下し、六字を安置す(八幡乙・上・三・卯)光現じ、行教、宇佐宮を勧鳩吹いたりはと▽諺に——となり(童蒙・三・卯)▽諺に——は、鳩をまねて人の吹くなり(能因・卯)▽狐師の隠れて鹿を待つに、手を合わせて鳩の声をまねて吹くを——と言ふ(興義・下余・卯)▽秋の初め鷹を取るとくくりし鳩の傍に細をはせて吹くを——という(興義抄に見ゆ袖中・二・卯)▽「ますらをの」歌の——は、山鳩の秋の盛り袖中に二▽盗人の仲間に吹かせ鳴らす事なり(袖中・二・卯)▽狐師の鹿を待ち、人を呼び、人に鹿ありと知らする時、手を

鳩のうずらはと▽——とは、鷹を獲るための鶉にて、鳩のきぎずとも言う(藻塩・二・五・卯)
鳩のきぎずはと▽鳩のうずらとは、鷹を獲るための鶉にて、——とも言う(藻塩・二・五・卯)
鳩の峯はとの峯(鳩の峯)▽八幡の示現により、行教、その山の頂を尋ぬるに、山城国の巽、男山石清水——に金色ありて三道に分る(八幡乙・上・三・卯)
▽行教、八幡の示現の——を見、三拝して、払曉に山の上を見るに、大樞ありて枝条より光を放つ(八幡乙・上・三・卯)
▽行教、男山石清水——に三日夜候い、法味をもつて飾り、清和天皇に奏聞す(八幡乙・上・三・卯)
▽清和天皇、貞観元年九月十九日、勅使を下し、——を実検点走し、木工寮権允良基に宣旨を下し、六字の宝殿を造り八幡三所を安置す(八幡乙・上・三・卯)
▽男山——の上に大光現じ、行教、宇佐宮を勧請す(謡抄・難波・三)
鳩吹いたりはと▽諺に——というは、すさまじき意なり、と和歌童蒙抄に見ゆ(袖中・二・卯)
鳩吹くはと▽——は、鳩をまねて人の吹くなり(能因・

原寸大

鳩屋はと▽——の内に鳩をくくりおき、鳩を吹きて鷹を取るを「鳩吹く」というとある説に見ゆ(袖中・二・卯)
鳩也はと▽一条天皇、奥州より奉りし鷹を、形鳩に似し故、——と名付け秘藏す(八幡甲・下・卯)▽——の親を鷹捕るに、——喚きて物食わず、占に放てとあれば、一条天皇、惜しけれど放つ(八幡甲・下・卯)▽八幡の宝前に飛び行き、尾の鈴を食い切り幣棚に置きて飛び去るに、山鳩同じく飛び行く(八幡甲・下・卯)▽親の取られし梢に大小の巢を上下にかくるに、鷹飛下り取らんとて下の巢

なこ歌こ歌こ四てる、通、て呼言師ま狐きくこ取こ